

JR南武線 連続立体交差事業について

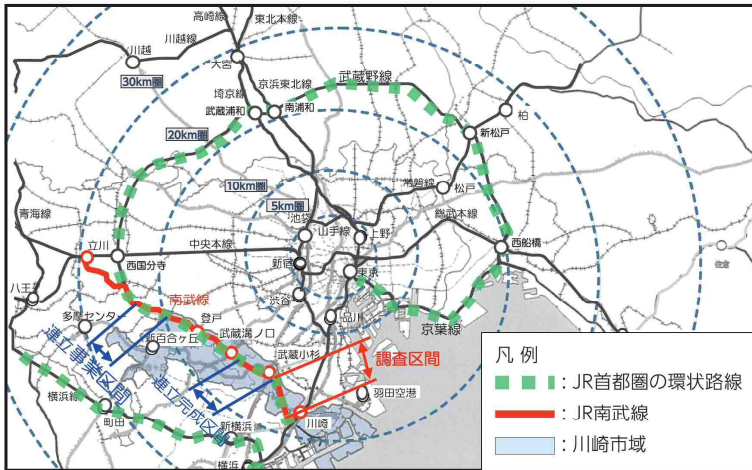


JR南武線は川崎駅から立川駅を結び、首都圏において環状方向の鉄道輸送の一翼を担う鉄道路線であり、川崎市域を縦断し市内の各拠点を結び、川崎市において重要な交通基盤となっています。

地域の生活利便性や生活環境に関する課題、さらに、災害発生時の物資輸送を担う緊急輸送道路や広域避難場所への避難路確保といった災害応急対策に関する課題が顕在化しています。

沿線の武蔵小杉駅や鹿島田駅周辺では、企業の研究開発機能の集積や大規模な都市型住宅の整備が進んでおりますが、一方で、国道409号や県道大田神奈川などの踏切に起因する渋滞といった道路交通に関する課題、また、路線バスの速達性低下・通学路の安全性の低下など

そのため川崎市では、これらの課題に対し、道路交通を円滑化し地域分断を解消する連続立体交差事業を早期に実現し、安全で利便性が高く災害に強いまちづくりを推進するため、連続立体交差化に向けた取組を実施しています。



JR南武線 概要

延長 35.5km (支線を除く) 駅数 26駅

ピーク混雑率

195% (武蔵中原駅～武蔵小杉駅)
(首都圏ワースト5位) ※平成26年度

運行本数

- 平日
 - 朝 2～4分間隔
 - 日中：1時間あたり8本 (各駅停車6本、快速2本)
 - 夕方：4～5分間隔
- 土曜・休日
 - 朝 5～6分間隔
 - 日中：1時間あたり9本 (各駅停車6本、快速3本)
 - 夕方：7～8分間隔

川崎駅周辺



武蔵小杉駅周辺



新川崎駅・鹿島田駅周辺



統計データ (21大都市における川崎市)

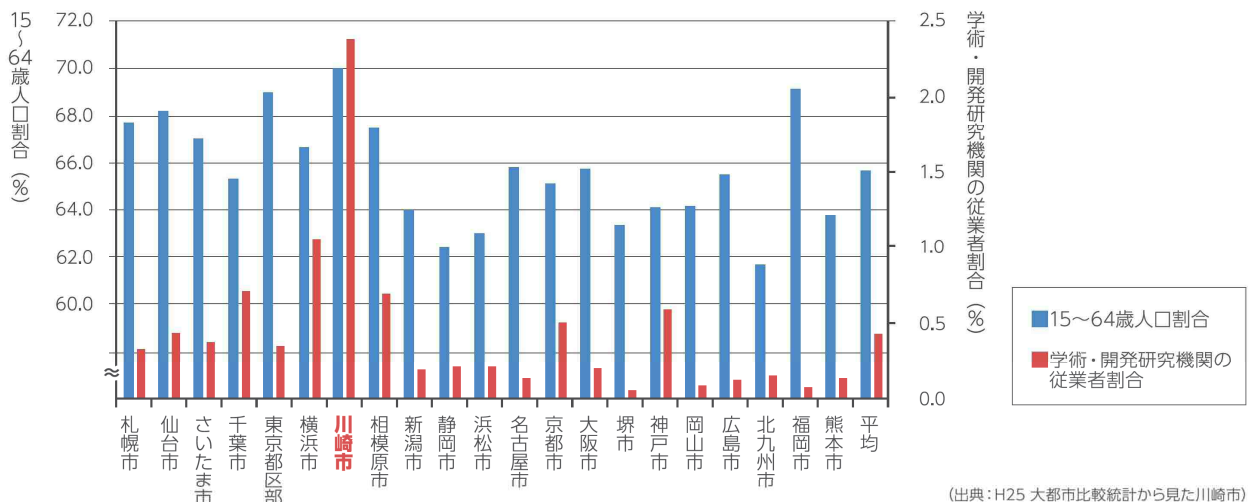


生産年齢人口 (15～64歳) の割合が、21大都市のなかで最も高く、川崎市は若い世代の多い都市となっています。

川崎市の特徴となっています。

川崎市の全産業に占める「学術・開発研究機関の従業者数」の割合は、平成25年度に2.4%と、大都市平均の0.4%の約6倍となっており、研究開発型企業の集積が

こうした優位性を将来に渡り持続させるため、連続立体交差化により、羽田空港や各拠点と沿線地域との結びつきを強化し、道路・鉄道の利便性を更に向上させます。



(出典：H25 大都市比較統計から見た川崎市)